

Title	境界の破壊者としての吸血鬼：ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を読む
Sub Title	Vampire as a boundary-breaker : a reading on Bram Stoker's Dracula
Author	河内, 恵子(Kawachi, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1996
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.71, (1996. 12) ,p.136(127)- 159(104)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00710001-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

境界の破壊者としての吸血鬼 ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を読む

河 内 恵 子

はじめに

英国において、19世紀末に発表された Gothic Novels には、double (二重人格) や vampire (吸血鬼) を扱った作品が多い。前者の代表的作品といえば、*The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde* (1886) が挙げられるだろう。また、後者を代表するものとしては当然のことながら *Dracula* (1897) が想起される。

ヴィクトリア朝時代 (1837-1901) に、英国は産業革命の成功を基盤に繁栄をきわめ、その植民地政策ゆえに、世界最大の帝国になったが、ヴィクトリア朝後期には、対外的にも対内的にもさまざまな問題を抱えるようになった。産業や貿易の面で強力な競争相手が出現し、アメリカ合衆国に代表される新興勢力も登場してきた。独立を求める植民地国や自治権を主張するアイルランドも大英帝国にとっては悩みの種であった。英国内ではどうだろうか。急速な繁栄を支える過酷な労働に対処出来ない者が漸次増加していった。また、機械化が進めば進むほど失業者の数は増え続けた。大都市には、スラム街が生まれ、犯罪が加速度的に日常化した。国家の安定と繁栄に対する不安は、徐々にではあるが、確実に、19世紀末の英国国民の精神を蝕ばんでいった。

男女平等の権利と自由な生き方を求める the New Woman が出現したのもこの時代である。結婚し子供を生み家庭を守ることが女性の仕事だという考え方が強かった時代において、the New Woman の主義主張はヴィクトリア朝道徳観への大きな挑戦と受けとめられた。

唯美主義と芸術至上主義を標榜する芸術家たちの考え方や生き方も「真

面目に働き、常識を重んじる」ことをモットーとしたヴィクトリア朝の人々にとっては大きな脅威であった。Homoerotic な世界を生き、その世界を美しい作品へと昇華させた Oscar Wilde (1854-1900) はその典型といえるだろう。

1859年に発表された Charles Darwin (1809-82) の *On the Origin of Species* の内容が一般的なレベルで理解されるようになったのもこの時代である。動物と人間との関係を直線的なものと理解（あるいは誤解）した人々は、人間の動物への atavism（先祖返り）の可能性を信じ、「適者生存の法則」からこぼれ落ちた生存不敵者の追放を考えるようになった。Degeneration（衰退・墮落）の思想である。Degenerates（衰退した者・墮落者）のカテゴリーには、犯罪者、the New Woman、同性愛者といった大英帝国の常識を根底から揺るがす者たちが含まれていた。競争相手の外国人や独立を希求する植民地の人々もまた、帝国の存在を脅かす者としてこのカテゴリーに含まれていった。

この degeneration の思想を増長したのが、Cesare Lombroso (1836-1909) や Max Nordau (1849-1923) が提起した criminology（犯罪学）と physiognomy（人相学）とが合体した、人間を「原始的且つ動物的」なものとそうではないものとに区別し、それゆえに犯罪者にはそれ特有の顔つきがあると主張する、criminological physiognomy とでもいうべき考え方である。

ヴィクトリア朝の屋体骨を形成していた中産階級の人々の多くは、以上のような不安を感じながら生きていた。Stephen Arata は、19世紀末の英国は“three forms of decline: national, biological, aesthetic”に苦しんでいたと述べ、nation と body と art にまつわる危機感が人々をおそい、この危機感を反映した作品が19世紀末に多く書かれたと続けている⁽¹⁾。大英帝国の物理的縮小化、都市のスラム街の増加、犯罪の急増、セクシュアリティのあいまい化（the New Woman や homosexuals）、decadent art の出現——確固としていたはずのヴィクトリア朝の価値観を揺り動かすこれらの現実を、最も的確に描いたのが、そしてその優れた描写力ゆえに、

読者の不安をさらにかきたてたのが Gothic novels である。本論文では、vampire と人間との熾烈な戦いを作品化することによって19世紀末の英国が抱えていたさまざまな不安を鮮やかに描出している Bram Stoker (1847-1912) の *Dracula* (1897) を取り上げ、出版後百年を経た現在にまで伝えられている不安の美学を検証してみたい。

Dracula

Dracula は複数の二項対立が錯綜する作品であるが、小説世界全体を大きく二分するのは vampire の Count Dracula と Dracula との戦いの指導者の役割を務める Van Helsing 教授である。Van Helsing の指揮の下で vampire hunting に従事するのが、事務弁護士の Jonathan Harker、貴族の Lord Godalming, Arthur Holmwood, 精神科医で病院をも経営する Dr Seward, そして、Arthur と Seward の友人である裕福なアメリカ人 Quincey Morris である。Dracula に襲われるのは Arthur の婚約者 Lucy Westenra と Jonathan の妻 Mina Harker である。(小説の前半部分では Mina は Jonathan の婚約者として登場する。) Count Dracula には三人の vampire women がつき従っている。Seward の病院に入院中の Renfield は、Dracula を “master” と呼び、その暗黒の力に心酔しているが、Dracula との関係は明白ではない。

ここで注目しておきたい点は、Count Dracula と戦う若者たち全てが、「親のない者」として、あるいは「親を喪う者」として、設定されていることである。Jonathan は孤児であり、親身になって面倒をみてくれた親がわりの事務弁護士事務所所長の Mr Hawkins は、全ての財産を Jonathan に譲った後突然亡くなる。Mina は孤児である。Lucy の父親は、Lucy と同じく夢遊病であったと語られるだけで作品には登場しない。Lucy の母は持病の心臓疾患が悪化して亡くなり、Arthur の父 Lord Godalming は莫大な財産を Arthur に遺して亡くなる。Arthur の母については全く語られない。Morris の父についても同様である。彼の母については、作品の最終場面で言及されるだけである。この小説作品をこうした若者たちの成

長の記録, すなわち, Bildungsroman としてとらえることはもちろん可能であるが, 先に述べたように, *Dracula* を Count Dracula と Van Helsing との二項対立という図式の中で読み解くと, 「親を喪った若者たち」の親になろうとする vampire と Van Helsing との戦いというとらえ方が成立してくる。しかも, Dracula は Transylvania から, Van Helsing は Holland からというように外国から侵入してくる二つの力の戦いという面を考慮に入れると, 親権を求める争いは, 植民地化政策を押し進めてきた大英帝国に対する逆植民地化の構図をもまた呈してくる。二つの力に深く関わる三人の若者の姿の分析を中心に, *Dracula* が持つ錯綜する世界の面白さを見つめてみたい。

作品を構成するのは, 手紙, 日記, 電報, 新聞, 録音記録 (phonograph diary) 等であるが, 主軸となっているのは, Jonathan, Mina, そして Seward の日記である。各々の記述が伝える情報は時には重複し, 時には矛盾しながらもお互いを補強しながら, 大きなうねりとなり, さまざまな価値観が迷走する Gothic World を現出する。

Jonathan Harker

London に屋敷を買いいたいという Count Dracula の為に事務手続きをしている事務所から出張を命じられて Jonathan は Transylvania へと赴く。“The impression I had was that we were leaving the West and entering the East.”⁽²⁾ East へと旅する Jonathan は事前に Transylvania について詳しく調査していた。

In the population of Transylvania there are four distinct nationalities: Saxons in the south, and mixed with them the Wallachs, who are the descendants of the Dacians; Magyars in the west, and Szekelys in the east and north. I am going among the latter, who claim to be descended from Attila and the Huns. This may be so, for when the Magyars conquered the country in the eleventh

century they found the Huns settled in it. *I read that every known superstition in the world is gathered into the horseshoe of the Carpathians, as if it were the centre of some sort of imaginative whirlpool ; if so my stay may be very interesting*⁽³⁾. (Emphasis added)

複数の種族が織りなす文化とあらゆる迷信の発祥の地への旅は興味深いものになるはずであった。Jonathan を迎えた Count Dracula は “excellent English” を話す老人であり、Jonathan が Transylvania について予備知識を入手していたのと同様に、彼は英国について詳しく調査していた。図書室にはありとあらゆる参考資料が備わっており、Dracula は立派な事務弁護士として仕事をこなせるほどの実務的能力も有していた。ここで明らかになるのは、Jonathan が East へと旅する Orientalist であるとするならば、Count Dracula は、West へと旅立とうとしている Occidentalism であるという構図である。Count Dracula は知識ばかりではなく、潤沢な資金も貯えていた。West の中心地である London へ向かう準備は整っていたということになる。East から West へとという動きを、前述した逆植民地化の例ととらえることは当然可能であるが、Count Dracula の移動と資金とその容貌に、ユダヤ人像を読み込む批評家も少なくない。

His face was a strong — a very strong — aquiline, with high bridge of the thin nose and peculiarly arched nostrils ; with lofty domed forehead, and hair growing scantily round the temples, but profusely elsewhere. His eyebrows were very massive, almost meeting over the nose, and with bushy hair that seemed to curl in its own profusion. The mouth, so far as I could see it under the heavy moustache, was fixed and rather cruel-looking, with peculiarly sharp white teeth ; these protruded over the lips, whose remark-

able ruddiness showed astonishing vitality in a man of his years. For the rest, his ears were pale and at the tops extremely pointed; the chin was broad and strong, and the cheeks firm though thin. The general effect was one of extraordinary pallor⁽⁴⁾.

Judith Halberstam の指摘を待つまでもなく、この Dracula の容貌は、当時の雑誌等でカリカチュアの対象として、しばしば描かれていたユダヤ人の姿に重なってくる⁽⁵⁾。英国の帝国主義を崩す “parasitism” や “unhealthy dependence” の権化と見なされていたユダヤ人は、帝国の力が弱体化すればするほど、ひとつの race (種族) として扱われ、まるで monster のように表現されるようになる。根強い anti-semitism の底辺には、race としての力を持つユダヤ人に対する恐怖心があった。Bram Stoker は人々のこのような心理を巧みに利用して、Dracula 像を創ったといえる。ところで、Dracula をもひとつの monster ではなく、ひとつの race として読むこともできる。“We Szekelys have a right to be proud, for in our veins flows the blood of many brave races who fought as the lion fights, for lordship. . . .”⁽⁶⁾ このような勇敢な race の血の頂点に立つのは自分自身であると豪語してから Dracula は今日の “dishonourable peace” においては血は貴重だと語る。勇者の戦いが過去のものとなったこの時代では、血が流されないからだ。新しい血を求めて、血を提供しうる新しい race を求めて、Dracula は Transylvania 地方の気高き貴族の本拠地から West を目指して旅立とうとしている。West には、戦いに常勝して、植民地を拡張していた大英帝国という勇者の race があるのだ。

Jonathan は Dracula の城に囚われの身となり、ある夜、三人の vampire women に襲われる。二人は Count Dracula のように大きな黒い瞳を持つ dark lady であるが、一人は豊かな金髪と淡いサファイア色の眼をした fair lady である。この fair lady にどこかで会った気がするが、Jonathan には思い出せない。白い肌と金髪は West の象徴なのか。あるいは Jonathan 自身の母親の象徴なのか。はたまた、婚約者 Mina に繋が

る存在なのか。Jonathan は “some dreamy fear” という感情が心に生じるのを意識している。真珠のように白い歯とルビィのように紅い “voluptuous lips” を持った女の誘惑が始まる。不安を感じながらも、あの唇に口づけされたいと熱い欲望に Jonathan は燃える。The fair woman が近づいてくる。

I was afraid to raise my eyelids, but looked out and saw perfectly under the lashes. The fair girl went on her knees, and bent over me, fairly gloating. *There was a deliberate voluptuousness which was both thrilling and repulsive*, and as she arched her neck she actually licked her lips like an animal, till I could see in the moonlight the moisture shining on the scarlet lips and on the red tongue as it lapped the white sharp teeth. Lower and lower went her head as the lips went below the range of my mouth and chin and seemed about to fasten on my throat. Then she paused, and I could hear the churning sound of her tongue as it licked her teeth and lips, and could feel the hot breath on my neck. Then the skin of my throat began to tingle as one's flesh does when the hand that is to tickle it approaches nearer — nearer. I could feel the soft, shivering touch of the lips on the supersensitive skin of my throat, and the hard dents of two sharp teeth, just touching and pausing there. *I closed my eyes in a languorous ecstasy [sic] and waited — waited with beating heart*⁽⁷⁾. (Emphasis added)

官能的な場面である。“thrilling”でありながらも“repulsive”な興奮を “a languorous ecstasy [sic]”の中で待つ Jonathan の姿は、受け身の姿勢であるがゆえに feminized されている。男は強く、たくましく、積極的存在であるべきだと主張するヴィクトリア朝の価値観はここで大きく揺れ動く。

Vampire women から Jonathan を救うのは、Dracula である。強い力で女を斥け、*“How dare you touch him. any of you? How dare you cast eyes on him when I had forbidden it? Back, I tell you all! This man belongs to me!”*⁽⁸⁾ と激しく叱責する Count の姿に、Jonathan をひとりの男として求める homoerotic な感情を読み取ることも出来れば、息子を危機から助け出す father figure を求めることもできる。どちらにしろ、その強くたくましい言動は、feminized された Jonathan と鋭い contrast を示している。

Vampire women は袋に入った子供を投げ与えられると、嬉々としてそれを襲う。Vampire women には母性は全くないのだ。Father figure としての Dracula に対立する mother figure としての役割を担っていたとしても、それは、母性の欠如した false mother として現われている。

Lucy

19歳のLucyに三人の男が求婚する。Arthur Holmwood, John Seward, Quincey Morrisから同じ日に求婚されたLucyは、涙ながらにSewardとMorrisを拒否した模様を、幼い時からの親友のMina Murryに書き送っている。自らを“horrid flirt”かもしれないと断りつつも、Lucyは拒絶されても潔く友情を誓うSewardやMorrisが示す男の気高さに強く心を動かされている。

My dear Mina, why are men so noble when we women are so little worthy of them? . . . *Why can't they let a girl marry three men, or as many as want her, and save all this trouble?* But this is heresy, and I must not say it⁽⁹⁾. (Emphasis added)

好きな男であれば、何人とも結ばれたいと告白するLucyの奔放さはヴィクトリア朝時代の女性に課せられていた結婚観とは大きく異なる。健康で明るいLucyがCount Draculaに襲われるのは、この後すぐのことで

ある。

貧血の為弱っていく Lucy を三人の若者たちは何とか救おうとするが、
どうすることもできない。Lucy の母も Arthur の父も各々重い病気にか
かっている。Seward は自分自身の恩師である Professor Van Helsing of
Amsterdam に助けを求める。Philosopher であり、metaphysician であ
り、scientist である Helsing は鋼鉄のような精神力と伶俐な理性と暖か
い心の持主である。まさしく理想的な father figure である。その容貌は
どうだろう。

[A]man of medium height, strongly built, with his shoulders set
back over a broad, deep chest and a neck well balanced on the
trunk as the head is on the neck. The poise of the head strikes one
at once as indicative of thought and power ; the head is noble, well
-sized, broad, and large behind the ears. The face, clean-shaven,
shows a hard, square chin, a large, resolute, mobile mouth, a good
-sized nose, rather straight, but with quick, sensitive nostrils, that
seem to broaden as the big, bushy brows come down and the mouth
tightens. The forehead is broad and fine, rising at first almost
straight and then sloping back above two bumps or ridges wide
apart ; such a fore-head that the reddish hair cannot possibly
tumble over it, but falls naturally back and to the sides. Big, dark
blue eyes are set widely apart, and are quick and tender or stern
with the man's moods⁽¹⁰⁾.

先に引用した Count Dracula の容貌とは異なり、知的でたくましい。
Van Helsing は Lucy の貧血が vampire に起因することをつきとめ、科
学者でありながらも、伝説と民間伝承の力を借りて、彼女を救おうとす
るが失敗する⁽¹¹⁾。また Dracula によって吸われた血を補給する為に輸血と
いう手段も採られる。婚約者の Arthur を筆頭に、Seward, Van Helsing

ing, Morris の順で輸血が行われる。Van Helsing は “A brave man’s blood is the best thing on this earth when a woman is in trouble”⁽¹²⁾ と語ると同時に Lucy の屋敷に奉公している女たちの血は使わないと表明する。これは、女を救うのは男の血である、すなわち、女に生命力を与えるのは男の体液であるということを主張しているとともに、奉公人という階級の低い者の血は使わないと伝えてもいる⁽¹³⁾。階級制度と男と女の heterosexual な結び付きを象徴する場面ではあるが、この輸血という行為は、Lucy という一人の女の体内で四人の男の血が結合したという点では、homoeerotic な場面としても理解できる。Count Dracula のこの後の吸血行為もまた Dracula が四人の男と結合してゆく過程と読める。ここでもうひとつ考えておかなければならないのは、Arthur は Lucy に輸血したのは自分だけだと信じている点である。これは Van Helsing の配慮によるものだが、Arthur は輸血して以来、Lucy と結婚した気持ちになっており、ここでも血液が男と女を性的に結び付けていることが判る。Van Helsing が Lucy を polyandrist と、そして自らを bigamist と呼ぶのもこの説を補強していることになる。

Lucy は男たちの努力もむなしく息を引きとるが、その直前に、突然、“soft and voluptuous voice” で Arthur に呼びかける。

“Arthur! Oh, my love, I am so glad you have come! Kiss me!”
Arthur bent eagerly over to kiss her; but at that instant Van Helsing, who, like me [Seward], had been startled by her voice, swooped upon him, and catching him by the neck with both hands, dragged him back with a fury of strength which I never thought he could have possessed, and actually hurled him almost across the room⁽¹⁴⁾.

この場面は、Count Dracula の城で三人の vampire women に Jonathan が誘惑された場面を彷彿させる。Father figure としての Van Helsing

が官能的な誘惑者 Lucy から Arthur を救うわけだが Dracula が Jonathan を救い出したのと同様の分析が成立する。Arthur に対する Van Helsing の愛情の吐露は彼自身の過去をも語る。

My heart bleed for that poor boy — that dear boy, so of the age of mine own body had I been so blessed that he live, and with his hair and eyes the same. There, you know now why I love him so. And yet when he say things that touch my husband-heart to the quick, and make my father-heart yearn to him as to no other man . . . ⁽¹⁵⁾. . . and me, with my poor wife dead to me, but alive by Church's law, though no wits, all gone — even I, who am faithful husband to this now-no-wife, . . . ⁽¹⁶⁾.

おそらくは狂っている妻と今は亡き息子。Van Helsing もまた孤独な father である。Arthur に対する強い愛情表現は、family というヴィクトリア朝時代に最も重んじられた社会の unit から、父と婚約者を喪うことで、落ちこぼれてしまった彼を救うことによって、自らも、father figure としての役割を再び手に入れようとする Van Helsing のメッセージであろう。

Lucy は vampire woman として、“undead” の存在として蘇る。彼女を伝統的な方法で抹殺しなければ、Lucy 自身にも、また英国社会にも平安は訪れない。“bloofer (=beautiful) lady” を装って Lucy は次々と子供たちを襲う。彼女の“sweetness”は“adamantine, heartless cruelty”へと、そして“purity”は“voluptuous wantonness”へと変化している。“Undead”で“unclean”な Lucy は“a languorous, voluptuous grace”で再び Arthur を誘う。“Come to me, Arthur . . . My arms are hungry for you. Come, and we can rest together. Come, my husband, come!⁽¹⁷⁾”誘惑に負けそうになる Arthur を救い、“undead”な“nosferatu”である Lucy を“God's true dead”にする為に儀式にのっとって彼女に杭を打ち

込むように説得するのはもちろん Van Helsing である。Arthur はついに Lucy の心臓に杭を打ち込む。

The Thing in the coffin writhed ; and a hideous, blood-curdling screech came from the opened red lips. The body shook and quivered and twisted in wild contortions ; the sharp white teeth champed together till the lips were cut, and the mouth was smeared with a crimson foam. But Arthur never faltered. He looked like a figure of Thor as his un-trembling arm rose and fell, driving deeper and deeper the mercy-bearing stake, whilst the blood from the pierced heart welled and spurted up around it. His face was set, and high duty seemed to shine through it ; . . . ⁽¹⁸⁾.

官能的な性的な場面である。Feminism の立場にある批評家たちの中には、rape を想起させる場面と論じるものもいるが⁽¹⁹⁾、Lucy の激しい変身と vampire のエネルギーを描出する為には、そして、Count Dracula の次の攻撃を効果的に演出する為にも律動的な暴力は必要である。また、Arthur に男として力の復権を認識させる手段としても巧みに組み入れられた場面である。

三人の vampire women と同様に、“voluptuous woman” に変身し、しかも幼き子供の血を吸った vampire Lucy の姿は何を暗示しているのだろうか。Count Dracula は「好きな男であれば、何人とも結ばれたい」と願う Lucy の潜在的願望を顕在化し、抑圧されていたその官能を解き放ったのだ。それゆえに、この性的に解放された woman vampire を、彼女が子供を犠牲にすることを勧案すれば、母親にはなれぬもの、すなわち、母性の欠如したものととらえることができる。Joseph Andriana の言葉を借りれば “motherhood and sexuality do not mix” ということになる⁽²⁰⁾。Lucy をも含む vampire women が、夫と子供に尽くす「家庭の天使」というヴィクトリア朝時代の理想的女性像の対極に位置することは明らかで

ある。

Jonathan Harker, そして Lucy Westenra と, Count Dracula と直接的に対峙する若者を中心に論を進めてきたが, 最も深い関わりを持つがゆえに小説作品の軸となる人物が Mina Harker である。

Mina

Mina が小説の中心人物となるのは, 彼女が Count Dracula の城から失踪したまま行方不明になっていた Jonathan と再会し結婚してから後のことである。Jonathan が如何なる方法で城から脱出したのか, その経緯については語られてはいないが, 激しい恐怖を体験したために暫時心身が衰弱しきった状態に陥ったが為に, 入院を余儀なくされていたのだ。良き妻としての役割を Mina は驚異的な熱意をもって遂行してゆく。Hawkins によって遣された事務弁護士事務所の所長としての仕事が出来ようになるまでに Jonathan は回復するが, この間に, Lucy は vampire woman となり, 悲劇的な死を迎えていた。Jonathan と Lucy との共通の敵に立ち向かう為に, Mina は作品の中心へと, すなわち, Lucy を喪って, いや, 自らの手で彼女を葬って, 悄然としている男たちの輪の中に登場する。

Mina は, 結婚前は assistant schoolmistress として働き自立していた。タイプライターを巧みに使いこなし, 速記術を身につけ, 鉄道の時刻表にも詳しいという有能な secretary の資質を持った彼女を the New Woman ととらえることもできるが, Mina 自身は the New Woman の過激な行動を批判している⁽²¹⁾。受動的な妻ではなく, 積極的に生きる有能な妻としての役割が彼女には与えられている。Lucy のように, 依頼心を前面に出している女性ではなく, 自立しながらも良き家庭人である, という理想的な姿は, the New Woman に代表される新しい価値観と従来の「家庭の天使」との中間に位置するバランスのとれた女性を象徴している。

Lucy から情報を得ていたとしても, Mina が, Lucy に求愛した三人の男たちと Van Helsing とに実際に会うのは初めてである。偶然にも各々の男と一対一で Mina は出会うことになる。そして, 男たちは全て,

Mina との最初の出会いの時に、彼女に強く魅了されてゆく。

Mina は夫 Jonathan によって速記で書かれた日記をタイプし、Seward が記録した phonograph を原稿に書き直し、Count Dracula に関するその他の情報を全て整理し、Dracula 関連資料を作り上げてゆく。複数の人間によって、さまざまな手段で記録された情報を、Mina は根気よく整理してゆくのだ。不定形に増殖するかのように見えた、Dracula によって引き起こされた事件が時間軸にそって配列されてゆく。理性的な Mina の仕事は、Van Helsing の知識と共に Dracula 像を明確に伝える手段として大きな力を持つようになる。

Mina と出会うことによって、各々の男は Lucy の事件で心にうけた深い傷を癒されてゆく。男たちは、「冷静沉着で強い男」という武装を解除し Mina の前でカタルシスの涙を流す。

With a sob he [Arthur] laid his head on my shoulder, and cried like a wearied child, whilst he shook with emotion. We women have *something of the mother* in us that makes us rise above smaller matters when *the mother-spirit* is invoked; I (Mina) felt this big, sorrowing man's head resting on me, as though it were that of the baby that some day may lie on my bosom, and I stroked his hair as though he were my own child. I never thought at the time how strange it all was⁽²²⁾. (Emphasis added)

Mina が持つ母性愛と理性的な判断力は、Van Helsing の言葉を借りると、“man's brain with woman's heart”ということになるが、この Mina を中心に男たちは vampire hunting のグループを結成する。そして、彼らばかりではなく、Seward の病院に入院している Renfield までもが Mina と出会うことで Count Dracula への狂気の信奉から目覚め、彼女を守ろうとするようになる。

Dracula を抹殺しなければならない。何故ならば、それは単に生か死か

の問題ではなく、“It is that we become as him ; that we henceforward become foul things of the night like him -- without heart or conscience, preying on the bodies and the souls of those we love best⁽²³⁾” という Van Helsing の言葉からも分かるように、Dracula に襲われれば、「死ぬ」のではなく vampire として「生きる」ことを強えられるからだ。“Undead” な存在になることは、人間から “Other” な存在になることを意味し、そこには死して行くべき神の国への道が開かれなことになる。

しかし、変幻自在の Count Dracula に Mina が襲われるのは時間の問題である。小さな波状攻撃を繰り返されている間、Mina は徐々に活力を失ってゆき、Lucy が Dracula に襲われていた際に経験していた、現実と夢との間を往復する感覚にとらわれる。そして、ある夜、決定的な攻撃を被ることになる。夫 Jonathan が傍で眠っている時、Dracula は二人の寝室に侵入して Mina を襲うのである。しかも、異変を聞きつけて部屋に駆けつけた Van Helsing, Arthur, Seward, Morris もそのおぞましい光景を目のあたりにする。このクライマックス・シーンは、作品中で三度繰り返し語られる。Seward が目撃した有り様を語り、Mina が自らの体験を男たちに報告し、再び Seward が Dracula によって深く眠らされていたためか、事情を把握できていない Jonathan に説明する、といった具合である。

With his left hand he held both Mrs Harker's hands, keeping them away with her arms at full tension ; his right hand gripped her by the back of the neck, forcing her face down on his bosom. Her white nightdress was smeared with blood, and a thin stream trickled down the man's bare breast which was shown by his torn-open dress. *The attitude of the two had a terrible resemblance to a child forcing a kitten's nose into a saucer of milk to compel it to drink⁽²⁴⁾.*
(Emphasis added)

自ら傷つけた胸から Mina に血を吸わせている Dracula の姿から、「仔猫に無理やりミルクを飲ませようとしている」場面が連想されるとすれば、「母が幼き子に乳を与えている」と読み進め、Dracula に親の、しかも母親の image を重ねることも可能だろう。

Mina 自身の告白を調べてみよう。

With a mocking smile, he placed one hand upon my shoulder and, holding me tight, bared my throat with the other, saying as he did so: “First, a little refreshment to reward my exertions. You may as well be quiet; it is not the first time, or the second, that your veins have appeased my thirst!.. He placed his reeking lips upon my throat! . . . but it seemed that a long time must have passed before he took his foul, awful, sneering mouth away. I saw it drip with the fresh blood! . . . “ . . . And you, their best beloved one, are now to me, *flesh of my flesh; blood of my blood*; kin of my kin; my bountiful wine-press for a while; and shall be later on my companion and my helper. . . . You have aided in thwarting me; now you shall come to my call. When my brain says ‘Come!’ to you, you shall cross land or sea to do my bidding; and to that end this!” With that he pulled open his shirt, and with his long sharp nails opened a vein in his breast. When the blood began to spurt out, he took my hands in one of his, holding them tight, and with the other seized my neck and pressed my mouth to the wound, so that I must either suffocate or swallow some of the -- Oh my God! my God! what have I done?⁽²⁵⁾ (Emphasis added)

Seward の伝えた scene が読者に喚起する image とは全く違った image がここでは伝えられる。Count Dracula が Mina の血を吸った後、強引に自らの血を Mina に吸わせるという reciprocal な行為の中に男と

女の性的な関係を読み取ることは十分可能である。Draculaにとって Mina は今や「肉の肉」, 「血の血」であるということは、Dracula が彼女に洗札を施したと考えることもできる。Mina は “undead” なものとして存在し始める。Van Helsing が Mina の額に聖餅を押し付けると、その額は、焼かれ、傷が残ってしまう。聖餅によってもたらされた傷は汚れた身体を神が拒絶している証拠である。“Unclean, unclean” と自らの汚れを卑下しながらも、Mina は神の許しがあるまでこの “mark of shame” に耐えようと決意する。恥辱の証である傷は、Hester Prynne (Nathaniel Hawthorne [1804-64]: *The Scarlet Letter* [1850]) の胸に縫い付けられた Adultery (不義) を示す文字 A を想起させる。Dracula との血の交換は男女の性愛行為と読めるのだ。

この額の傷は Dracula にも共有されることになる。

Mina が woman vampire へと完全に变身してしまうのを防ぐ唯一の方法は出来るだけ早く Dracula を破壊することだと決意した男たちは、熱心に探索し、ロンドン市内の Dracula の隠れ家のひとつを発見する。Count Dracula との対決の場面で Jonathan は彼に切りつけ額に傷を負わせるのだが、この傷が Mina との連帯を象徴しているのは間違いない。ここでもうひとつ注目したいことは、切りつけられた際に Dracula が、裂かれた外套から金銭を落とす点である。Transylvania の城に貯えられていた財宝と共にこの場面は、Occidental Dracula が経済統制のルールを守りながら英国に住みついているということを示している。Foreigner が人々に怪しまれることなく root を持つ為には金銭が必要なのである。ヴィクトリア朝の英国では、経済的基盤さえあれば、たとえ他国の者でも、家屋敷を購入し respectable Victorian として大都会に身を隠すことができた⁽²⁵⁾。

Mina の歯は鋭くなり、目つきはきつくなる。絶望の淵にありながらも彼女は、しかし、資料を整理し、推理し、vampire を探す男たちに協力する。その冷静な行動と暖かい心にふれて、男たちは幾度となく涙を流し、繰り返しお互いの結束力を確かめ合う。Lady の為に命を賭ける騎士

のように彼らは Mina に忠誠を誓う。実際、Mina を中心に手を取り合って輪を形成する男たちの姿が数回描かれている。

Mina は Van Helsing に催眠術をかけてもらい、Dracula の居場所やその行動を探る。Dracula と Mina は確かに結ばれているのだ。Renfield と Master Dracula がそうであったように。しかし、Dracula に血の洗礼を受けて、その力に支配されながらも、他方で Van Helsing が強大な知識と技で Dracula に対抗している。Mina はふたつの力の間で微妙なバランスを保っている。

Van Helsing は研究と調査の結果 Count Dracula の実体をようやく完全に把握する。 Noble Warrior として戦っていた時代には Dracula は “iron nerve” と “more subtle brain” と “more brave heart” を持っていたが、歴史の流れの中で brain の発達が進まなかったために、今は child-brain しか持っていないこと、しかし、この brain は成長し続けていることが明らかになってくる。“*Festina lente* (Hasten slowly)” をモットーとする Count Dracula は un-dead であるがゆえに時間を味方にして、すなわち、歴史をゆっくりと、生きてきたのだ。肉体を新鮮な血で保ちながら。Dracula の brain は成長し続けている。それが child-brain である間に抹殺しなければ、Dracula は知的に英国人たちと対等になってしまう。超自然的な力に知力が加わると、人間たちが勝利する可能性はなくなってしまう⁽²⁶⁾。

Gothic child

近代的な武器（銃やナイフ）、伝統的な手段（聖書、聖餅、にんにくの花、十字架）、豊富な情報——男たちが、孤立無援に戦う Dracula を追い詰めるのに時間はかからない。Dracula は故郷に逃げ帰る。West を志向した Occidentalist Dracula は逆植民地化に失敗したのである。男たちは “old knights of the Cross” さながら East へと Dracula を追ってゆく。Mina も同行し、Transylvania の Dracula の城の近くでは三人の vampire women に “Come, sister. Come to us.” と誘われるが、Van Helsing

が用意した聖なる円の中にとどまることによって救われる。Van Helsing も Jonathan 同様 three vampire women に魅了され、その魅力に屈しそうになるが Mina の *soul-wail* を心に聞いて目覚め、Lucy を葬った時のように、三人の心臓を突き刺し、その首を切り落とす。

Dracula は自らの城の近くで Jonathan と Morris の攻撃を受けて消えてしまう。Jonathan の *kukri knife* (ネパールのグルカ人の使う広刃の短剣：英国の植民地の象徴) が Dracula の喉をかき切り、Morris の bowie knife (アメリカ軍人 J.Bowie が考案した、アメリカ開拓時代のさや付き獵刀：アメリカの力の象徴) がその心臓を突くと Dracula は一瞬の間に塵と化して消えてしまうのだ。その時 Mina の額の傷も消え、彼女は“clean”な存在に戻る。ところが、Dracula につき従っていたジプシーの首領に Morris が刺され、このアメリカ人は “I am only too happy to have been of any service” という言葉を残して死んでしまう。Morris の死を、古きよき英国を打ち負かそうとしていた新興勢力、アメリカ資本主義の敗北と読む研究者もいる⁽²⁷⁾。もう一人の犠牲者は Renfield である。彼は英国の精神病院の一室で、Mina に近付こうとする Dracula を阻止しようとして、この monster に惨殺されてしまった。狂った者と脅威的な外国人は degenerates として排除されたと考えられるだろう。

Arthur, Seward, Jonathan, Mina の四人の英国人と彼らを父のように見守る Van Helsing が生き残り、父権制の下での秩序が回復される。Arthur と Seward もそれぞれ結婚し、親のない若者たちが家族を形成し始める。Jonathan と Mina には息子が生まれる。

Seven years ago we all went through the flames ; and the happiness of some of us since then is, we think, well worth the pain we endured. It is an added joy to Mina and to me that *our boy's birthday is the same day as that on which Quincey Morris died*. His mother holds, I know, the secret belief that some of our brave friend's spirit has passed into him. *His bundle of names links all*

our little band of men together ; but we call him Quincey.⁽²⁸⁾ (Emphasis added)

おぞましい出来事から七年が経過している。Dracula huntingに加わった男たちの名前を持つ息子はふだんは Quincey と呼ばれている。Quincey Morris の命日が誕生日というこの Little Quincey には確かに男たちの血が流れている。男たちが輸血した Lucy の血を吸い、その血を Mina に吸わせた Dracula——Little Quincey の中には Mina と Jonathan の血以外に、Lucy, Arthur, Seward, Van Helsing, Morris, そして Dracula の血が流れているのだ。Little Quincey の誕生日は Morris の命日であるばかりではなく、Dracula の命日でもあるのだ。新しい vampire story が開幕する準備は整えられている。

これまで考察してきたとおり、*Dracula* には複数の二項対立が存在している。男と女、生と死、精神と肉体——こういった二項対立の存在を、すなわち明確な二元論の世界を守ろうとしたのが Van Helsing であり、この二項対立の世界を崩し、相反する価値観の間の boundaries (境界) を乱したのが Dracula である。さまざまな価値観が揺れ動き始めた19世紀末においてヴィクトリア朝の人々がもっとも怖れたのは、boundaries のあいまい化であった。彼らの不安を描くことによってその不安感をさらに増長したのが *Dracula* である。

Dracula 自身が二元論を否定した存在である。Monster and/but man, parasitical and/but wealthy, mother - figure and/but father - figure, repulsive and/but fascinating, etc. Dracula に襲われることは、理性と官能の境界があいまいになることであり、男と女の gender 認識が不可能になることであり、生と死の境が見えなくなることである。相対的な価値観が融合してゆく。Van Helsing は、混沌を生むこの融合を回避しようと努力していた。

Boundaries を行きつ戻りつしてその存在をあいまいにすること。

Boundaries が分け隔てている二元論的世界を融合して新しい世界を創ること。これが Dracula の目的であった。Dracula の仕事は Little Quincey という misogenation (異族種混交) の息子, Gothic child を生み出して完成されている。不安の美学は継承されてゆく。

NOTES

- (1) Arata, 2.
- (2) Stoker, 7.
- (3) Ibid., 8.
- (4) Ibid., 28.
- (5) Halberstam, 251-257.
19世紀の英国人たちが抱いていた anti-Semitism を gothic Novel という context の中で考察している。
- (6) Stoker, 42.
- (7) Ibid., 54.
- (8) Ibid., 55.
- (9) Ibid., 80-81.
- (10) Ibid., 235.
- (11) Vampire を寄せつけない為ににんにくの花で Lucy を守ろうとするが, Lucy の母親によって二度までもこの計画は挫折してしまう。これは mother figure が Dracula の力とは戦えないことを暗示しているのだろう。
- (12) Stoker, 194.
- (13) Christopher Craft は血液を精液を象徴するものととらえている。Cf. Craft, Christopher, *Another Kind of Love*, 87.
- (14) Stoker, 208-209.
- (15) Ibid., 226.
- (16) Ibid., 227.
- (17) Ibid., 272.
- (18) Ibid., 277-278.
- (19) Cf. Anne Cranny-Francis, Carol A. Senf, Elaine Showalter.
- (20) Andriano, 112-113.
- (21) Stoker, 119.
- (22) Ibid., 295.
- (23) Ibid., 305.
- (24) Ibid., 363.

- (25) Franco Moretti はその著 *Signs Taken for Wonders* の中で *Dracula* を英国と他国との経済闘争を扱う作品と解釈している。
- (26) Van Helsing は、*Dracula* の child - brain を Cesare Lombroso と Max Nordau の説に従って、“criminal” と分類している。Cf. Stoker, 438-439.
- (27) Cf. Moretti.
- (28) Stoker, 485.

Select Bibliography

TEXT

Stoker, Bram. *Dracula* (1897), ed. Maurice Hindle. Harmondsworth : Penguin, 1993.

CRITICISM

Andriano, Joseph. *Our Ladies of Darkness : Feminine Daemonology in Male Gothic Fiction*. Pennsylvania : The Pennsylvania State University Press, 1993.

Arata, Stephen. *Fictions of Loss in the Victorian Fin de Siècle*. Cambridge : Cambridge University Press, 1996.

Auerbach, Nina. *Our Vampires, Ourselves*. Chicago : The University of Chicago Press, 1995.

- - - . *Women and the Demon : The Life of a Victorian Myth*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1982.

Beckson, Karl. *London in the 1890s : A Cultural History*. London : Norton, 1992.

Botting, Fred. *Gothic*. London : Routledge, 1996.

Craft, Christopher. *Another Kind of Love : Male Homosexual Desire in English Discourse, 1850-1920*. California : University of California, 1994.

Cranny-Francis, Anne. “Sexual Politics and Political Repression in

- Bram Stoker's *Dracula*", in *Nineteenth Century Suspense : From Poe to Conan Doyle*, eds. Clive Bell et al. Houndsmill : Macmillan, 1988.
- Gagnier, Regenia. "Evolution and Information, or Eroticism and Everyday Life in *Dracula* and Late Victorian Aestheticism", in *Sex and Death in Victorian Literature*, ed. Regina Barreca. London : Macmillan, 1990.
- Gelder, Ken. *Reading the Vampire*. London : Routledge, 1994.
- Glover, David. *Vampires, Mummies, and Liberals : Bram Stoker and the Politics of Popular Fiction*. Durham : Duke University Press, 1996.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940*. Cambridge : Cambridge University Press, 1994.
- Halberstam, Judith. "Technologies of Monstrosity : Bram Stoker's *Dracula*", in *Cultural Politics at the Fin de Siècle*, eds. Sally Ledger and Scott McCracken. Cambridge : Cambridge University Press, 1995.
- Hurley, Kelly. *The Gothic Body*. Cambridge : Cambridge University Press, 1996.
- Malchow, H. L. *Gothic Images of Race in Nineteenth-Century Britain*. California : Stanford University Press, 1996.
- Manos, Nikki Lee and Rochelson, Meri-Jane, ed. *Transforming Genres*. London : Macmillan, 1994.
- Moretti, Franco. *Signs Taken for Wonders : Essays on the Sociology of Literary Forms*, trans. Susan Fischer, David Forgacs and David Miller. London : Verso, 1983.
- Punter, David. *The Literature of Terror : A History of Gothic Fictions from 1765 to the Present Day, Volume 2, The Modern Gothic*. London : Longman, 1996.

- Pykett, Lyn, ed. *Reading Fin de Siècle Fictions*. London : Longman, 1996.
- Senf, Carol A. "Dracula : the Unseen Face in the Mirror", in *Dracula : The Vampire and the Critics*, ed. Margaret L. Carter. Ann Arbor : UMI Research Press, 1988.
- Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy : Gender and Culture at the Fin-de-Siècle*. New York : Penguin, 1990.
- Stott, Rebecca. *The Fabrication of the Late-Victorian Femme Fatale*. London : Macmillan, 1992.
- Tracy, Robert. "Loving You All Ways : Vamps, Vampires, Necrophiles and Necro-filles in Nineteenth-Century Fiction", in *Sex and Death in Victorian Literature*, ed. Regina Barreca. London : Macmillan, 1990.
- Varnado, S. L. *Haunted Presence : The Numinous in Gothic Fiction*. Alabama : The University of Alabama Press, 1987.
- Warwick, Alexandra. "Vampires and the Empire : Fears and Fictions of the 1890s", in *Cultural Politics at the Fin de Siècle*, eds. Sally Ledger and Scott McCracken. Cambridge : Cambridge University Press, 1995.
- Williams, Anne. *Art of Darkness : A Poetics of Gothic*. Chicago : The University of Chicago Press, 1995.